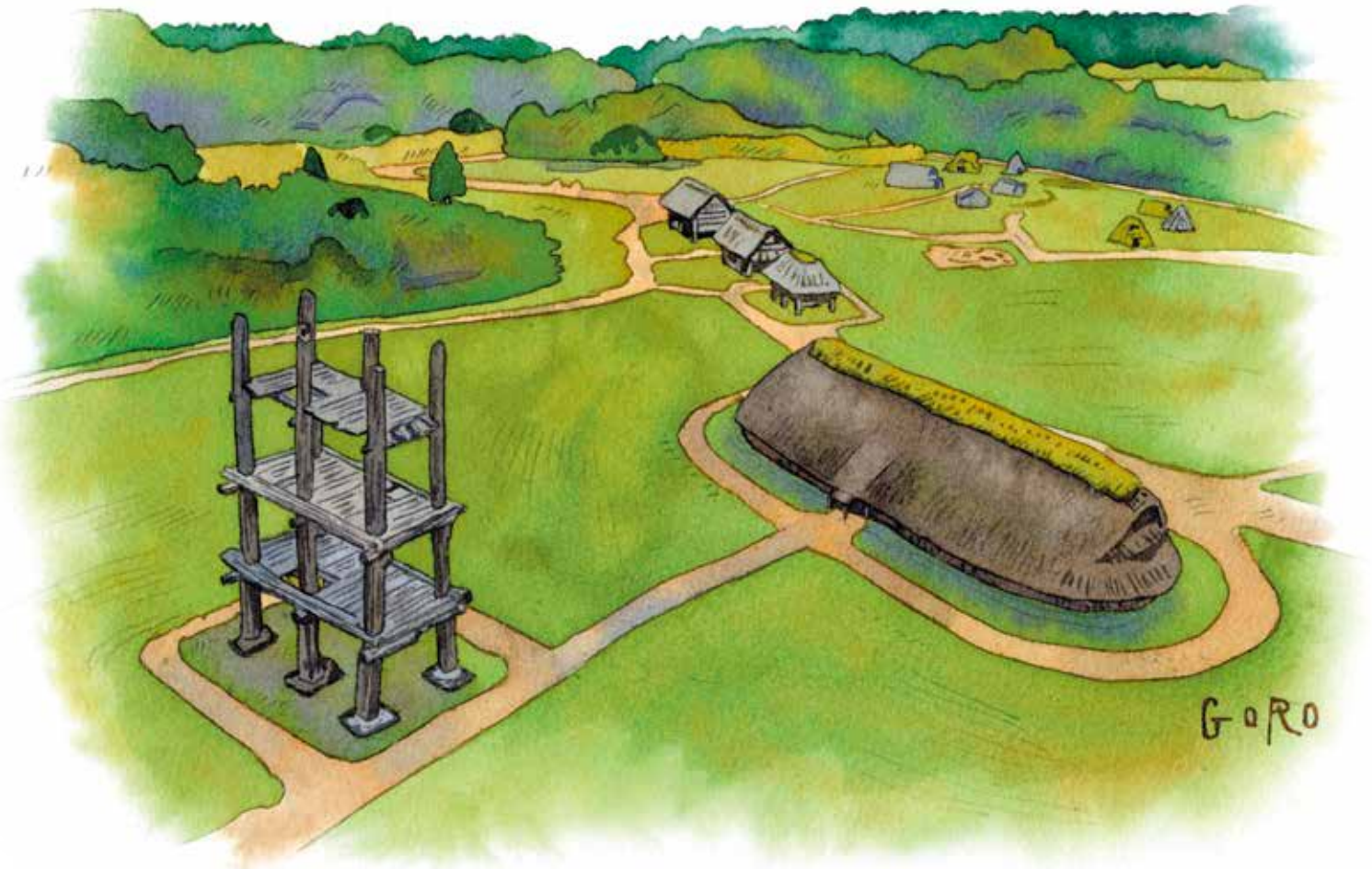


## 第1回 三内丸山遺跡

我々の御先祖様たちは、何を思って集い、まちを造ってきたのか。古代にさかのぼり、その原点を探る連載が今号から始まります。歴史を紐解きながら巡る“古代のまち”の世界をお楽しみください。



狩猟生活に明け暮れ放浪する野蛮人とみなされてきた縄文人。ところが、そんな常識を、三内丸山遺跡が覆した。1992年に発掘が始まり、縄文時代前期から中期末葉の、想像を絶する巨大集落が見つかった。

大昔は目の前に海岸線が迫っていて、交易都市でもあった。世界有数の海の難所・津軽海峡も、自在に往き来していた。三内丸山遺跡を象徴する六本柱建物跡（縄文タワー？）は、行き交う船を監視していたのか、それとも灯台の役割を担っていたのかもしれない。その六本柱建物は、縄文尺を用いた高度な技術で建てられていたことが分かっている。

さらにすぐ脇には、大型竪穴建物跡もみつかってい

る。幅約10メートル、長さ32メートルで、集会場か、雪の季節に籠もって作業をしていた場所なのかもしれない。

ところで、三内丸山遺跡の発見によって「高度な縄文文明」に脚光が当たっているが、違和感を覚える。と言うのも、最先端の考古学では、「縄文人が文明を拒んでいた」と考えるようになっているからだ。縄文時代は新石器時代で、樹木を伐採する石斧を手に入れていた。同時代の他の地域の人びとは農耕を始めたが、縄文人たちは、農耕を選択しなかった。農耕は、文明と富を人びとにもたらず一方で、戦争を招き寄せたのだ。縄文人たちは本能的に、それを知っていたのかもしれない。



### 関 裕二

歴史作家、武蔵野学院大学日本総合研究所のスペシャルアカデミックフェロー。著書に『古事記の正体』（新潮新書）、『アマテラスの正体』（新潮新書）など。



所在地  
青森県青森市

絵：佐々木悟郎